

加盟校紹介

青森県立青森高等学校

住所 青森市桜川八丁目一―二

生徒数 男子九一三名 女子三四四名

部員数 男子五名

顧問 中堀 亜都子

コーチ 山田 和彦

青森高校に空手同好会ができて今年で四年目になる。風の便りでは、後輩達が部昇格をめざして頑張っているようだ。思えば、僕の高校三年間は空手同好会発足に始まり、後輩に引き継ぐ事に終始したと思う。当手を振り返ってみると、最初に相談した青拳会の若井先生のアドバイスに従い、現在青森南高校に居られる太田先生を、入学早々訪ね顧問になってくれるよう懇願した。同好会とは言え、新しい部を創るには大変な時間がかかり、太田先生は大層苦労された。まず先生がピックアップしてくれた各道場の経験者を休み時間毎に誘って回り、少ないながらも三人で同好会がスタートした。部員は少しずつ増えてはいったが、困ったのは練習場所がない事だった。入学したばかりの一年生が創った同好会を、体育館使用割り当ての枠の中に入れてもらえない訳がなく、春、夏の間は中庭の芝生の上で、秋は早朝の格技場で、冬は他の部が終わってからの体育館と、練習場所は転々として、二年の初

めにやっとステージが練習場所に決まった。場所が決まり部員も五人になり、コーチも忙しい仕事の合間を縫って来てくれる事になったが、自分達一年生を引っばってくれる先輩が居ないのが何とも物足りなく、心もとないかぎりだった。

念願の試合に出られる事になったが、同好会だから、宿泊費、旅費、参加料等全て自己負担しなければならず、年三回の試合で遠征費は五万円を越え、防具を買う余裕がなかったので、試合の度青拳会に貸して頂いて大変助かった。そうやって試合に臨み負けた時、再三コーチに教わった事を活かせなかったり、忘れていたり、同じ失敗を繰り返した自分が情けなく、くやしかった。

(その思いは、三年の総体まで続いた)だが、楽しい思い出も沢山ある。毎日の練習と年二回の合宿、合宿中は練習時間も長く苦しかったが、一度もイヤにならなかった事はない。苦しさは楽しくさえ感じた。コーチと素手で組手の練習をしている時が一番楽しかった。夜練が終わり、身も心も空手に浸っていた状態から、徐々に現実になり引き戻されてゆく時が妙に心地良く、風呂の後で一つの部屋に集まり、皆で色々な事を語り合った。時にはコーチも交え、大学時代の話など聞いたり、合宿で得たものは多かった。

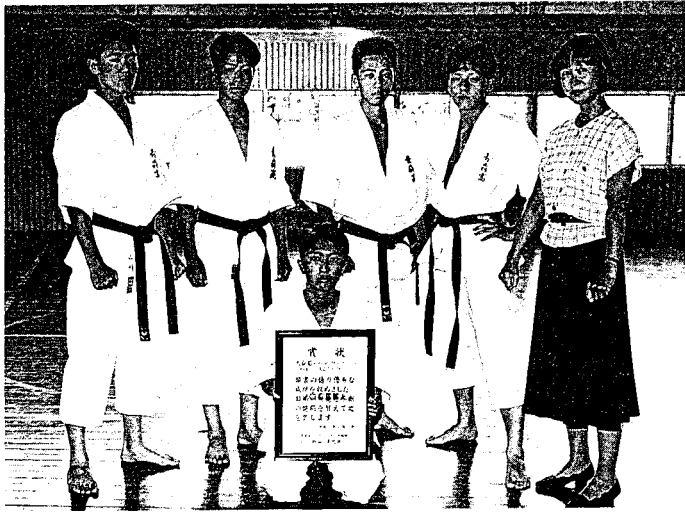
今こうして振り返ってみると、「高校三年間空手を通じて何を得たのか」という疑問につき当たる。楽しかった、苦しかった、心身が鍛えられた、では片付けられない何かを得たのは確かだ。漠然とはあるが、それは「人との出会い」ではないかと思える。直接、間接的に関わった人達は数え切れないが、三年間、お互いを励まし合い頑張ってきた仲間達(一生付き合ってくれよう)と

山田コーチ、若井先生、太田先生、これらの人達と会えたのは、何と言っても空手をやっていたおかげだ。僕はこれからも可能なかぎり、空手と関わってゆくつもりでいる。きっとまた、素晴らしい人達と出会えると思う。

(小川敦 平成四年三月卒札幌在住)

我々青高空手同好会は、今年が創立から四年目ということだ。統という面ではまだ浅い。しかし創始者たる二年上の先輩が同好会を創った当時は、練習場所がない、出費がかさむなど苦労が絶えなかったと聞く。現在でも練習場所がステージに落ち着いたものの、未だに部費が支給されない、遠征費等も自己負担と不十分な面が多く残ってはいる。

現在総部員五名、そのうち四名は高校に入ってから空手を始めた。そのため経験、実力、戦力の不足は否めない。その上三人は週何日かは塾に通っており、五人揃っての練習は他校とは比べられない程に少ない。



それでも皆が集まれる日は時間を最大限有効に使えるよう努力している。

こうしてみると、一見不都合な点ばかりが目立つが、逆に有利な面もある。部員が少ないのでお互いを良く理解でき、気心が知れた者同士なので団結力が強い、他に補欠がないので各自が自分の役割をキチンと果たさなければならぬという自覚を強く感じている、試合の経験を多く積むことができる、などである。そして何より我々が感謝し幸運に思っていることは、熱心な指導をしてくれる山田コーチがいることだ。コーチと顧問の先生にはこれからも我々に力を貸していただきたいと思っている。

これからは、一日も早く部に昇格するためにも稽古を積み実力をつけること、試合で先輩が残した成果を越えるよう頑張ることが我々の使命だと思っている。

(二年 野場健弘)

◎写真は立っている四人が発足当時のメンバー
左端が小川君